

特別寄稿論文

在韓在日朝鮮人：本国との新しい関係 “朝鮮”から“韓国”に“国籍変更”した在日3世を中心に

韓 榮惠 ソウル大学校国際大学院

1 はじめに

本稿は、いま韓国に住んでいる在韓在日朝鮮人のうち、朝鮮から韓国に“国籍変更”をした在日3世の事例を通じて、在日朝鮮人と本国の新しい関係を考察する試論である*1。“在韓在日朝鮮人”とは、韓国に「在外国民居所登録」をして滞在している在日朝鮮人を意味する。すなわち、日本に特別永住権を持つ在外国民の身分で韓国に居住している人たちである。実態としては韓国に生活根拠があっても、特別永住権を放棄せず在外国民の身分で生活している場合は、在韓在日朝鮮人といえる。

これまで在日朝鮮人のアイデンティティに関する研究や議論は、主に日本に居住している人たちを対象として行われた。日本で生まれ育った世代の成長とともに日本への定住志向が強まり、日本で生きる彼らにとって日本との関係は重要な問題であった。同化が進んだ3世にとっていまや“祖国”または“本国”は、直接的な結びつきは少ない、“ルーツ”としての意味を持つとされている。しかし、必ずしも3世が2世より本国との距離が大きいとは限らない。日本における地位の不安定性や経済的要因、日本と本国の関係、本国の政治的状況などによって、1世や2世の本国への往来は制限的にならなかつた。在日朝鮮人と本国との距離はむしろ1980年代以降に縮小してきたともいえる。韓国における民主化と在外同胞政策、日本における韓流、日韓関係の変化などによって、1990年代以降、在日朝鮮人の韓国・韓国人との接点は増大している。特別永住権の付与と再入国制度の整備などによる在日朝鮮人の地位の安定化も、彼らの国境を越えた移動にポジティブな役割を果たした。在韓在日朝鮮人はこの新しい流れのなかで生まれたものといえよう。脱冷戦とグローバル化の進展、韓国や北朝鮮、日本それぞれの政治・経済・社会的変動および本国と日本との関係の変化などを背景に、日本の特別永住権を持つ在外国民として韓国に居住する人々の存在は、在日朝鮮人のアイデンティティや彼らと韓国との関係をその本国の中で考察する必要性を提示している。つまり、在日朝鮮人研究において、彼らの日本定住を前提とする従来の観点は見直されるべきではないかと思うわけである。

韓国では、在韓在日朝鮮人についての実証的研究が最近出ており、筆者が調べた限りでは出版されているものとしては次の3編がある：ゆきぐら시계 정 우희, 2001「韓国に留学する在日学生の生と文化」(ソウル大学校修士論文)；권숙인, 2008「ディアスポラ在日韓人の“帰還”—韓国社会における経験とアイデンティティ」；김혜림, 2009「移動する国籍, 越境する主体, 境界的文化資本—韓国国内在日朝鮮人3世のアイデンティティ—ポリティクスと文化資本」。ゆきと 권(権)の論文は主に韓

国籍の在日朝鮮人3世にたいする研究で、対象を“在日”または“在日韓人”という概念で捉えている。それにたいして召(金)の論文は、朝鮮から韓国に国籍を変更して韓国で仕事をしている在日3世についての研究である。前者は、韓国と日本という2つのつながりを持つ在日朝鮮人たちが韓国でどのような経験をし、また、その経験は彼らのアイデンティティにどのような影響をおよぼしたかを探求している。インタビュー対象のなかには朝鮮学校出身者もいて、部分的に韓国系との違いを言及した箇所があるものの、全般的には韓国と日本、つまり本国と居住国の間での問題に焦点がある。おそらく後者は、韓国で在日朝鮮人の朝鮮と韓国間の“越境”の問題を取り上げた唯一の実証研究である。

本稿は、金と同様、朝鮮から韓国への“国籍変更”をして韓国に住んでいる20~30代の在日朝鮮人3世に焦点を当てている。しかし、金の論文が彼らの個人としての次元だけを考察しているのに対して、本稿では、彼らが形成している人間関係ないしは社会的関係をも重要な側面として捉えている。金だけでなく上記の他の論文の筆者たちも、主として個人にだけ焦点を当てている。上記の諸論文のインタビュー対象者がほぼ全員未婚者であるということは、そもそも筆者たちが家族などの人間関係の脈絡に関心を持つよりは個人的な問題としてみているためであろう。本研究の問題意識からして、私は在日朝鮮人の韓国定住または長期滞在に関心があったので、主なインタビュー対象としては、韓国人と結婚して家族を形成しているか、仕事を持っている韓国居住者、つまり、韓国に生活基盤を作っている人たちを選んだ。そして比較の視点を得るために留学生などの違う事例も含めた。この点で本稿は上記の先行研究を重要な参照としつつ、違う観点からそれらを補完するものと位置づけられよう。

本稿は在韓在日朝鮮人にたいする進行中の研究の一部で、本来の研究はもともと韓国籍の在日朝鮮人2世と3世、いち早く1980年代に朝鮮から国籍変更をしていた3世などをも含んでいる。本稿では、これまでインタビューを行った10人のうち、2000年代に朝鮮から韓国に国籍変更をした在日朝鮮人3世の5人を取り上げる。前にも述べたように、調査対象としては、まず、事実上韓国に定住の形で滞在している韓国籍・朝鮮籍の2世や3世、つぎに、定住とはいいがたい長期滞在者を選んだ。長期滞在の基準は在外国民居所登録の如何で、滞在の時間的な長さよりも住所をおいて生活していること、すなわち滞在の形態を基準とした。その理由は、国民という地位では本国の韓国人と変わらないが、住民登録か居所登録かによって本国国民と在外国民の2つの身分があるためである。従来の研究では、在日朝鮮人の日本定住を前提としているためか、韓国における滞在形態あるいは韓国居住にかかわる制度的枠組みには必ずしも注意を払ってこなかった。しかし、超国的移動の時代において、海外旅行のためにだけではなくて、定住地の日本を越えたところでの生活を試みる人々にとっては、国籍や居住にかかわる制度は重要なものなのである。

本稿における考察対象は女性4人、男性1人で、韓国滞在期間は6ヶ月~9年になる。彼らは2000年代に自分の意思で国籍を変更している。みな一定の段階まで朝鮮学校に通っていて、1人は大学、3人は高校、1人は中学校まで朝鮮学校出身である。両親をはじめ、ほとんどの家族が朝鮮学校卒業生で、両親のどちらかが朝鮮学校の教員をしたり、総連系の職場に勤めた経験がある。女性3人は韓国人男性と結婚して韓国に住んでいるが、そのうち2人は結婚をきっかけに国籍を変更した。未婚者の2人は留学で韓国に来ていたが、調査の時点で1人は任期づきの非正規職の研究ポ

ストを得て滞在していた。今回の調査対象は全員大学院在学以上の高学歴で、2人は韓国以外の海外に留学の経験がある。今回のインタビュー対象でもあった知り合いを通して紹介してもらったため、たまたまこのような構成になった面があるが、そもそも韓国に長期滞在する朝鮮籍からの国籍変更者がこのような傾向を持っているかもしれない。正式なインタビューは、2010年の12月から2011年の2月にかけて行われたが、電話で補充質問をすることもあった。本稿は、この5人の話を再構成し、それを通じて、今日における在日朝鮮人のアイデンティティと国籍に関する新しい論点を浮かび上がらせることを目的とした小論である。

最後に、本稿で使う“国籍変更”という表現について補足したい。韓国の憲法や国籍法によれば、在日朝鮮人は日本の外国人登録上の国籍表記に拘りなく韓国国民としての法的地位を持つ。しかし、在日朝鮮人の場合は、日本の韓国領事館に在外国民登録をし、日本の外国人登録に“韓国”と表記した場合に限って、実質的に韓国国民としての地位を公認される。本稿で朝鮮から韓国への“国籍変更”というのは、日本の外国人登録上に“朝鮮”と表記していたものを“韓国”に変え、領事館に在外国民登録をする手続きを済ませることを指しており、便宜上“国籍変更”ということにする。

2 “韓国に住んでみたい”

結婚、留学、仕事などは、彼らが韓国に住んでいる外形的な理由である。その基底には、別の内的動機が働いていた。それは“韓国に住んでみたい”という気持ちである。朝鮮籍でかつ朝鮮学校で習った3世の人たちにとって“韓国”とは一種のタブーだった。しかし、彼らはいろいろな形で韓国に訪れる機会を持ち、韓国にまた行ってみたいという気持ちになる。やがてそれは後に“住んでみたい”気持ちに発展する。ただ、そういった気持ちの引きがねとなった要因は、人によって違う。朝鮮学校出身の3世でも、1990年代までに中高生だった人たちと90年代の後半から2000年代にかけて少年期を朝鮮学校で習った人たちの間では、“韓国がタブー”というのは同じではないようである。

国籍変更者には、朝鮮籍のまま韓国を訪れ、韓国に住むようになってから国籍を変更した場合、日本で国籍変更をしてからはじめて韓国を訪れた場合がある。まず前者の場合の、最初韓国に来たきっかけや動機と、その後韓国に住んでみたい気持ちになった過程をみてみよう。2003年に韓国人男性と結婚して韓国に住んでいるチョンイと、2008年に交換留学で韓国に来て以来、パスポートのことで半年ほど日本に行っているものの、研究のために韓国に滞在しているテミンがそのケースに当たる。

チョンイが韓国に行ってみたくと思ったきっかけは、韓国に行ってきた朝鮮籍の後輩たちから韓国の民主化について聞いたことである。

「光州で大きな行事があって、朝鮮籍の学生たちが多く参加しました。韓国に行ってきた彼らが、とても感動的だった、韓国社会がそんなところとは知らなかったと、口をそろえていうんですね。韓国は民主化されてだいぶ変わっている、民族和解と脱冷戦の雰囲気を感じた、などの話を聞いて、ぜひ行ってみたいと思いました。」

チョンイは大学院生だった2000年12月に1人で韓国旅行を実現した。朝鮮籍だから、臨時パスポート(公式名称は“旅行証明書”)をもらって来た。はじめて来た韓国は知り合いもなく、寒くて、怖くて、寂しかった。翌年、大学院のゼミで韓国の大学との交流プログラムがあったので、再び韓国を訪れる機会を得た。その2度目の訪韓のときに、韓国に長く滞在したい気持ちになり、交換留学を申請した。朝鮮籍での3度目の韓国滞在は、交換留学として2002年5月～12月の6ヶ月間である。チョンイにとって韓国でいちばん幸せな時期だった。

「はじめは、知り合いもなく、大変だったんです。学校でも学生たちと距離があったんですが、1ヶ月後に始まったワールドカップのおかげで友達ができて、韓国に適応しやすくなりました。また、以前日本で会ったHANネット(仮名。在外同胞を支援する市民団体)の方に連絡して、よくそこに遊びに行きました。学校よりそっちの方にもっと行っていたんですね。そこの活動家たちと親しくなって……恋愛もするようになって……。主人もその活動家のひとりでした。夢のようで、韓国生活のなかでもっとも幸せなときだったんじゃないかと思います。」

留学期間が終了し、いったん日本に戻ったチョンイは、2003年に国籍を変更して韓国に戻り、結婚した。

テミンも国籍変更の前に数回韓国に来ている。はじめて来たのは朝鮮大学を出て総連の地方組織で働いていた2002年のことである。釜山アジアン・ゲームに参加した北朝鮮選手団のために総連が派遣した応援団の一員としてであった。そのときは、団体で動いたので韓国の人たちと交流する機会もなかったし、韓国へまた来れるとも思わなかった。しかし、後に日本の大学院に進学し、韓国の大学との交流プログラムで3～4回ほどソウルに来ることになり、その交流を通じて韓国にも知り合いが何人もできた。そのうちテミンは韓国に住んでみたくなって、2007年、博士課程に進むと同時に交換留学を申請した。博士論文のテーマも、韓国にいるからこそ研究できるものを選んだ。2008年の夏から交換留学で1年間ソウルに滞在した後、日本に戻ったが、韓国で博士論文関連の研究をもっと続けたいと思って、今度は大学の研究機関に1年間のポストを得て2010年から勤めている。交換留学の期間を含めると通算2年間の滞在になる。これがテミンが朝鮮籍として韓国にいた最後で、彼は滞在中に韓国籍に変更した。

1973年生まれのチョンイは80年代から90年代初まで、80年生まれのテミンは80年代の後半から90年代後半にかけて朝鮮学校に通っている。韓国では光州民主抗争以降の急進化した民主化運動の時期を経て、民主化、88年オリンピックという激しい政治的・社会的変動を経験した時期である。韓国が民主化された90年代には在日朝鮮人2世や3世の語学研修などのための韓国訪問が増えていたが、朝鮮籍の韓国訪問は、特別な場合を除いて、90年代の後半までは認められなかった。南北和解ムードのなかで朝鮮籍者の韓国訪問が可能となった90年代末になってからである。それ以降、朝鮮籍者の韓国訪問は拡大するが、それ以前に朝鮮学校で習ったチョンイとテミンは、朝鮮学校では“韓国”は一種のタブーだったという。“韓国”と呼ぶこともなかったし、卒業後にも“韓国”ということば

を使うには心理的抵抗感があった。分断状態の韓国に行けるとも全く思わなかった。ところが、2000年代に入って2人とも思いもよらなかった韓国訪問をすることになったのである。チョンイの場合、韓国に行ってきた朝鮮籍の学生たちから伝えられた民主化した韓国についての話、テミンの場合は南北スポーツ交流による初訪韓が、これまで彼らの心の中で距離を置いていた韓国にたいする好奇心、自ら行きたいと思う気持ちを引き起こしたといえよう。これまでは“祖国”や“本国”とは思えず、むしろ敵対的でさえあった国が、そこに行ってみたい、どういうところか知りたい“未知の本国”として近づいてきた。また、チョンイもテミンも“行ってみたい”を超えて“住んでみたい”と思うようになったのは、日本の大学院で日韓交流プログラムに参加したおかげである。韓国を2度、3度と訪問して、韓国の人々とふれあい、自分を受け入れ、理解してくれる人たちとのネットワークができたからこそ韓国に長く滞在したいという願望も生まれたのであろう。

日本で国籍を変更した後はじめて韓国を訪れたスンギョンとオクは、同じく高校まで朝鮮学校を出ているけれども、中高生のとき、チョンイやテミンが持っていたような韓国にたいする距離感や敵対感はありませんでした。また、今回のインタビューでスンギョンとオクは韓国の民主化にたいしてほとんど言及しなかった。反面、2人とも朝鮮学校在学中から韓国文化を媒介として間接的な韓国経験をしている。

英語が得意で、複数のスピーチコンテストで受賞した経験のあるスンギョンは、高校のときから留学の準備として国籍を変更したいと思っていた。しかし、それを実現したのは、大学卒業後の2005年である。オーストラリアに行きたくてワーキングホリデービザを取ろうとしたが、朝鮮籍ではそのビザを取ることができなかったため、これを機に国籍を変更したのである。2005年、国籍変更後、ビザ申請のためにはじめて韓国を訪れた。スンギョンははじめて接する韓国の風景に親しみを感じた。

「空港からソウルに行くとき接した風景は、どこか平壤に似ているという印象を受けました。自然の感じがそうだったんです。市内に入ってから、文字は全部読めるし話も通じるので、すごい親近感がありました。」

これは、はじめて韓国に来たとき、なんだか不安で、寂しさを感じたというチョンイとは全く違う反応である。はじめて韓国に来たとき、チョンイがまだ朝鮮籍だったのにたいしてスンギョンはすでに韓国籍になっていたことがその一因かもしれない。しかし、スンギョンは国籍を変える以前から積極的に韓国語を勉強していたので、韓国とのつながりを自然に感じていたのではなかろうか。スンギョンは朝鮮高校を卒業した後、1999年に日本の短期大学に進学し、短期大学卒業後には日本の4年制大学に編入した。短期大学には韓国語学科があって、韓国人の教員もいた。スンギョンはその教員に頼んで、個人的に韓国語を習った。高校のときから国籍変更を望んでいたスンギョンは、韓国語を学習することによって自ら韓国に近寄っていったのである。

オーストラリアでは韓国からの留学生たちと親しくなって、韓国語がうまくなった。それで自信がついてきたので、韓国に住んでみたいと思った。日本に戻ったスンギョンはいま勤めている会社に就職し、韓国に遊びに来た。そのとき、オーストラリアで知り合った友達にいまの婚約者を紹介してもらっ

た。日本語を習いたいということで紹介してもらったが、知り合ってから1年ほど過ぎたころ、結婚を考えるようになった。

チョンイとスングィョンは同じく高校まで朝鮮学校で習い、大学は日本の短期大学を出て4年制大学に編入して卒業している。また、大学時代には同じく総連傘下の学生組織である留学同(在日朝鮮人留学生同盟)に参加していた。留学同は、日本の大学に在学している在日同胞学生たちの集まりである。このような共通性にもかかわらず、2人の韓国にたいする態度はだいぶ違っている。チョンイとスングィョンの態度の違いの背景には、90年代末ころの韓国と総連系同胞の間の変化があるように思われる。それは、スングィョンより3歳年下のオクの事例にも見出せる。

オクは高校2年生だった2003年、姉の大学進学をきっかけに国籍変更の申請をした。2005年の春、大学入学の直前に手続きが完了して、「韓国かぶれ」の在日の友達と一緒に初めて韓国に来た。そのときの印象はあまりよくなかった。

「衝撃でした。日本のメディアに報道される韓国は高級なイメージですけど、私たちが泊ったところはあまりにも違っていたんです。ところが、日本に戻ったらまた行きたくなくなっちゃいました。」

オクは2007年に再度韓国に来た。今度は韓国が好きで何回も来ていた姉と一緒にだったので、主に姉の好きな明洞などの華やかなところを回った。オクは日本のメディアを通じて韓国にたいする“高級”イメージを持ったと述べているが、彼女の韓国にたいするイメージは、案外、総連系コミュニティを通じて形成されていたのではないかと思われる。それは、オクが総連系コミュニティにいち早く起きた韓流ブームについて語った次の内容から読み取れる。

「日本で韓流ブームが起きる前に、2000年ころと思いますけど、総連系のお母さんたちや教師の間で“韓流ブーム”が起きたんです。総連系の中で韓国に行ったりする人たちがいて、金持ちだとか、その人たちが韓国のビデオやCDを買ってきました。ちょうどそのころKN TV²が開局して、最初はお母さんたちが見ていたんですが、教師や生徒にも広がりました。先生たちも聞いていて知っていましたから。K-popを歌うとタブー視されてきたものも出てきますけど、教師に止められたりはしませんでした。当時は、ブラウンアイドギャルズ、GOD、などが人気があったんです。」

以上で見たように、スングィョンやオクは朝鮮学校に通い、かつ2人とも学校で優秀な学生だったが、中学または高校時代から韓国の言葉や大衆音楽を抵抗感なく受け入れている。また、朝鮮学校の教員あるいは総連系の職場で働いていた両親や周りの大人たちから批判されたり禁止されたりもしていなかったようである。その流れは朝鮮籍の人が韓国に来れるようになった90年代の末ころから進んでいるように思われる。

2010年に結婚して韓国に住んでいるイサンも、結婚を決める前には韓国に一度も来たことがない。夫に出会ったのは韓国や日本ではなく留学先のドイツであった。イサンは中学校までは朝鮮学校に通い、高校から音楽を専門とする日本の学校に行った。大学卒業後はドイツに5年間留学している(こ

のときは北朝鮮のパスポートでドイツに行った)。いまの夫と出会ったきっかけは、2006年にドイツで開かれたワールドカップである。近くで開かれる韓国対フランス戦のチケットを買いに朝早く行ったら、20名ほどの韓国人がチケットを買うために前日から野宿をしていた。彼らはすでに家族のように親しくなっていた。イサンもそのグループに加わって、一緒にチケットを買い、応援も一緒にすることになった。引き分けで試合が終わり、みんな喜んで競技終了後のグラウンドでビールを飲みながら遊び、連絡先を交わした。そのグループの一人が当時ロンドンに留学していたいまの夫である。その後、再会の機会を持ち、交流していくなかで、結婚を考えるに至った。

留学終了後、日本に戻って半年間滞在したあと、2010年の秋に韓国に来た。まずは、韓国の大学院博士課程に進学し、その後、韓国で結婚した。イサンはドイツで韓国人の友人に北朝鮮のパスポートを見せたことがある。その友人は他の人には絶対に見せるなどと言い、冗談ばく、昔だったら2人とも捕まっただけとも言った。イサンは、そのときはじめて、朝鮮がこのようにタブー視されているんだと感じたそうである。しかし、彼女は一度も行ったことがなく、朝鮮籍の自分がタブー視されるかもしれない韓国人と結婚して、なお韓国に住むことを躊躇なく受け入れている。イサンは夫が当初は自分が北朝鮮のパスポートでドイツに行っていることを知らなかったかもしれないという。2006年ワールドカップの韓・仏戦でイサンは彼を含む韓国人のグループに合流し、彼らと親しく交流したし、それが夫との最初の出会でもあった。おそらくイサンは、その場で自分を在日朝鮮人とは紹介しても総連系とはいわなかっただろう。ドイツで、一方では南北の体制対立を実感しながら、他方では彼女自身が進んで韓国に近づいていたのがうかがえる。総連系コミュニティにおける韓流ブームにたいするオクの話から推測すると、イサンもドイツ留学以前に日本で韓国について間接的ながら接することができ、好奇心ないしはポジティブなイメージを抱いたのかもしれない。次章でも述べるが、彼女の両親は朝鮮籍で韓国に何回か訪問していたので、可能性は十分あると思う。

3 自己実現

以上で見た元朝鮮籍の在日朝鮮人3世の人たちは、きっかけや理由はそれぞれ違っても、みんな韓国にたいする好奇心ないしは憧れを持つようになって、その延長線上で韓国に定住または長期滞在するに至っている。しかし、その気持ちだけで韓国に生活基盤を置いたり長期間住むことを決心したであろうか。韓国は彼らにとって自己実現を追求するうえで可能性を見出せる場所でもあったと思う。それをもっとも鮮やかに示してくれる例の一つはスンギョンである。

前節で見たとおり、スンギョンは英語も韓国語も積極的に勉強し、非常に高い水準に達している。言語能力は彼女にとってもっとも重要な資産で、韓国で生活するうえでも自信の源泉になっている。しかし、韓国語に積極的な意味を見出したのは最近のことである。

「高校時代までは、韓国語ができるということが何の得になるのかと疑問に思っていました。大学時代から、これが得になるように自分で作っていかうと思いはじめたんです。」

スンギョンが高校時代の韓国語というのは、朝鮮学校で習った“ウリマル＝朝鮮語”のことで、すなわち北朝鮮の標準語である。90年代の日本社会において、その“ウリマル”の能力をどのように生かすのか、その展望はあまり明るくなかったと思われる。しかし、スンギョンが大学生だった2000年代の前半は韓国と日本の民間交流が拡大し、“韓流”という新しい現象が現れつつあった時期である。スンギョンは、韓国語を勉強することによってもともと自分が持っていたウリマルの能力を自己実現のための資産に発展させようと思ったのである。

スンギョンは、オーストラリアから日本に帰ってすぐにアメリカ系コンサルティング会社に就職した。韓国の友人の紹介で知り合った韓国人男性と結婚すると決めるとき、彼女は会社を辞める覚悟までした。韓国の友たちが、彼女は日本語、英語、韓国語の3ヶ国語が堪能だから、韓国へ来たら仕事はいくらでもあると言ってくれたので、何とかなるだろうと思った。ある日、あまり期待はせず、上司に韓国に支社を作ってもらえないかと打診してみたら、上司は案外、即座にOKした。アメリカ人の上司は、スンギョンが韓国語を話せることを高く評価していた。会社を辞める覚悟のうでで気軽に聞いてみたのに予想外の反応を受けて、スンギョンは社長の気持ちがかかわらないうちに動こうと、急遽10月に韓国に入国した。インタビュー時点で結婚を2ヶ月後に控えていた。スンギョンの仕事は、主に韓国の金融機関の専門家たちにインタビューをして、市場動向を報告することである。インタビューはほとんど韓国語で行い、報告書は日本語か英語で書く。

韓国語を自己実現の重要な資産としたスンギョンにたいして、オクは音楽によって自己実現を追求した。オクは現在大学院で韓国学を専攻しているが、韓国に来た本当の理由は音楽をやりたいからだったという。日本の大学では法学を専攻した。高校時代、生徒会委員としてリーダー的な存在だった彼女は、高2のとき朝鮮学校出身者に国立大学受験資格を認めないことへの抗議運動に参加し、署名活動などを率先して行った。その活動を通して、外国人の権利にかかわる法的基盤づくりが大事であると思うようになり、またその背後にある社会の仕組みも知りたくなって、法学部に進んだ。しかし、大学で音楽のほうで自分の才能を発見する。大学ではアカペラサークルに入って音楽活動をしたが、そこで才能を認められ、卒業のころにはプロとして一緒にやらないかという誘いをも受けた。オクは、いま自分がいちばん好きで、いちばん力を発揮できるのは音楽だという結論に達した。そして、音楽をやるために韓国留学の道を選ぶ。音楽のためになぜ韓国へ来なければならなかったか。オクは次のようにその理由を説明した。

「日本では、当分、音楽をやれないという気がしました。それに、大学のときから留学したいと思っていたんです。アメリカだったらいちばんよかったですでしょうけど、他でも行けたらよくて、アメリカに留学するお金もなかったの、いちばん近い韓国に来ることにしました。法学も面白くて好きでした。しかし、それはいつでもできると思いました。……日本で法律家になるということは、すなわち“在日として”、“在日のための”法律家になることを意味します。自分が法学部に入ったのも、在日としての使命感があったからなんですね。そういった“在日”という枠から抜け出したいくなりました。両親の期待からも解放されたかったし……。大学時代に韓国語を知らない在日の学生たちの勉強会である“韓国文化研究部”に属して論文を書いたこともあるし、そこでいまの学校についての情報を得て、関心を持

つようになりました。……専攻は韓国学だけど、授業以外はほとんど音楽を作る作業をやっています。」

オクにとって韓国行きの目的は好きな音楽をやるためであって、それは民族性の追求というよりは、反対にそこから解放され在日ではない個人としての自分自身を追求することであった。それは在日がいやだということではなくて、在日朝鮮人を拘束している存在条件といえようか、その存在拘束性から解放されたいという非常に実存的な問題であるように思われる。オクは、日本にいれば、音楽への思いを抑えて在日のために法律関係の職を求めるはずだと予想したらしい。だから、とにかく日本を離れ、好きなこと、得意なことを自由に追求できる海外に行くことと決めたのである。

オクは、その海外が韓国でなくてもよくて、近くてお金がそれほどかからないところだったため、たまたま韓国へ来たかのように話したが、彼女の内面に音楽と韓国とのつながりができていたのではないかと推測される。オクは母親の影響で小さいときからソウルなどのブラックミュージックが好きでよく聞いていた。総連系のお母さんたちや教師たちの間に韓流ブームが起きたころ、中学生だった彼女は、韓国の大衆音楽を通じて音楽への思いを自覚する。

「K-popを聞き始めたとき、音楽ってなんていいものなんだろう、という気持ちが爆発しました。それは、K-popがいいというのではなくて、音楽というものにたいする気持ちですね。当時は、韓国のCDを手に入れるのが難しかったんで、テレビを見ながらピアノでメロディをなぞってみたいしました。」

オクが音楽をやりたくて日本を離れる決心をしたとき、経済的な面などの現実的な事情で韓国を選んだにしても、もしこのような経験がなくて、なお韓国では彼女の求める音楽活動ができるかどうか全くわからなかったり、否定的だったりしたら、韓国に行こうとは思わなかったかもしれない。

朝鮮大学出身のテミンが韓国に住んでみたいと思ったのは、日韓の大学院の交流を通じて人々に接してからだった。彼は、韓国に住みたかったので、博士課程の研究テーマとして韓国に関するものを選んだ。しかし、彼の場合も、韓国に住みたいという心情だけで国籍を変えてまで韓国滞在を続けようと思ったのだろうか。研究者を目指すテミンにとって、韓国に長期滞在して研究をし、さらに何らかの経歴をつけることは、就職にメリットがある。日本で就職する場合、韓国専門の教員または研究者は、韓国にたいする専門的な研究や講義ばかりでなく、韓国との交流における役割を要請されることが多い。韓国で作上げたネットワークや生活・活動の経験は、そのとき重要な資産となる。また、韓国に滞在しながら、韓国の学界で活動をすると、日本で習得したものを資産として韓国に就職の機会を得るかもしれない。

韓国に住んで9年になるチョンイは、結婚後の数年間は憂鬱だった。その時期には、自分はここに縛られているのではない、いつでも日本に帰れる、と自分に言い聞かせて精神的な自由を保とうとした。しかし、いまは、韓国の方がもっと好きで、ここで仕事を見つけて定着したいと思っている。結婚後チョンイは、博士課程を修了したものの将来の展望が不透明で、ストレスが多かった。自分の人的資源を捨てて韓国に来てしまったような気がして、何で韓国に来たのか後悔したこともある。当時、夫は市民運動の活動家として思想的にはリベラルだったが、家庭生活では保守的で収入もなかった

ので、チョンイの生活はかなり不安定だった。日本とは違う家族関係もストレスの一因だった。しかし、結婚2年後、出産して慌しく過ごしているうちに、博士号なしには研究もできないことに気がついて博士論文を書くことと決心し、2008年に博士号取得に成功した。その後は、大学の講義や研究などの社会活動をするようになり、精神的にも安定してきた。その間、夫も別の仕事をして収入を得るようになった。チョンイは、この9年間で個人的には成熟期だったと思っている。いまは以前に比べて韓国の観点から物事を見ているような気がするし、ここが好きで、たぶん定着するという。

チョンイの例は、当初どのような理由で、また、どのような気持ちで韓国に住むことになったとしても、韓国で自己実現の道が閉ざされていたら、いまとは違う道を模索したかもしれない可能性を示してくれる。イサンの場合も、結婚を決めて韓国に来たけれども、結婚より先に大学院に進学している。大学院では日本語、ドイツ語の両方できるので、役に立ててもらうことが度々ある。弦楽器専攻なので演奏のために日本などに行くこともある。チョンイ、スンギョン、イサン、この3人の例をみると、女性でも結婚して韓国に来ることがキャリアの断絶を意味するのではない。キャリアを追求することができるし、もしかしたら、韓国に来たからこそ新しい可能性を見出せるかもしれない。自己実現の可能性のある社会には、住みたいし、新しい人間関係も作れるし、愛情も生まれてくる。もちろん社会には両面性があるので、このようにキャリアを追求できる反面、朝鮮籍だったことによる心理的負担も存在している。これについては5で考察する。自己実現と関連してここで筆者が見出したのは、韓国が彼らのキャリアの発展に役立つからといって、彼らが韓国に来たことを単純に実用主義的に解釈することはできないという点である。

4 国籍変更と家族

いまや国籍は運命的なものではなくて個人の選択となっているとされる。確かにそうであると思うが、それは必ずしも個人の独断で決められるということの意味しない。国籍変更は家族の問題でもあって、個人の意思で変える場合でも家族と相談しているし、個人の国籍変更は他の家族にも何らかの影響を与える。変更にあたって家族の協力が要する場合もある。国籍変更は、国籍にたいする実用主義的な考え方が強くなった今日でも、やはり簡単な問題ではない。とくに、何らかの亀裂線を持つ2つの国の変更はそうである。在日朝鮮人の国籍変更の際には、家族の脈絡を見る必要があると思う。

本稿で取り上げている5人の国籍変更時期は2003年、2005年(2人)、2007年、2010年と、主に2000年代半ば以降である。変更の理由はチョンイとイサンが結婚、テミンとオクが研究または学業、スンギョンは海外留学など、ほとんど個人的なことで、自分の意思で国籍を変更している。しかし、家族に反対されたことはなく、むしろ支持されたという点で共通している。5人のうち3人は、国籍変更の際、家族全員と一緒に変更した。1人は数年前に家族がすでに変更しており、1人だけ、家族は朝鮮籍を維持している。しかし、その場合でも、国籍変更をめぐる家族と葛藤が起きることはなく、家族の支援と理解を得ている。

チョンイの場合、姉が14年前に韓国籍の在日朝鮮人と結婚した際に韓国籍に変更したが家族は朝

鮮籍を維持していた。が、2002年に北朝鮮による拉致事件の影響で日本で朝鮮籍として生きていくのが不安になって、家族で国籍変更について話し合ったことがある。そのときはチョンイの強い反対のために変更しなかった。ところが、その翌年にチョンイ自身の結婚を理由に国籍を変更することになったのである。チョンイは、家族に恥ずかしくてならなかった。とくにジェンダーの観点から面目がなかった。チョンイの母親は朝鮮学校の教師を勤めたことがあり、父親は自営業で総連コミュニティに属していた。しかし、韓国人との結婚をととても喜んでくれたし、実用主義的な観点の所有者である父は、韓国では政府批判などしないでそこの実情に合わせて生きていくようにと助言した。2003年、チョンイの結婚を目前にして家族全員が国籍を韓国に変更した。チョンイの結婚は、2002年に保留となった課題を一挙に解決する機会にもなったわけである。

スングォンは高校のときから国籍変更を望んでいたが、朝鮮籍のときに1回でも北朝鮮に行ってきたほしいという母の強い要望があったので、国籍変更の時期を延ばしていた。高校3年(1998年)と大学生のとき(2001年)各1回ずつ北朝鮮に行ってきた、これで韓国籍に変えられると思った。母はスングォンが北朝鮮に行ってきた以上、今度は違う機会を与えるべきだと考えて、国籍変更に同意したという。このとき家族全員が変更の申請をして、2005年に母を除く家族全員が韓国籍を取得した。母は1979年に日本籍から朝鮮籍に国籍を変更した前歴があるので、今回の変更にだいぶ時間がかかってしまい、4年後の2009年に変更を果たした。母方の祖母が日本人で、結婚を反対されて婚姻届を出せなかったため、母は祖母の戸籍に入り、もともと日本国籍だった。結婚のとき祖父母が朝鮮籍取得を条件としたので、母は結婚と同時に国籍を朝鮮に変更した。

オクは高校生のとき姉の大学進学をきっかけに家族ぐるみで国籍を変更した。2005年、大学入学の直前に手続きが済んで韓国籍となった。姉は以前から韓国がとても好きで、年に2、3回は韓国に行っていた。最初は臨時パスポートで往来したが、臨時パスポートでは回数に制限があるため、もっと自由に行き来したいと言っていた。姉の大学進学に際して、今後、海外に行くことが増えると予想されたこともあって、国籍を変更することにした。母は韓流ブームを通じて韓国に理解があったし、父もちょうど総連系の同胞企業から民族団体とは関係のない日本系企業に移っていた。また、兄弟もみな朝鮮学校を卒業して日本の大学に通っていたので、気がかりなく韓国籍に変えることができた。

テミンの場合、母と弟は2002年ころ韓国籍を取得しているが、父は朝鮮籍を維持している。両親は離婚していたので国籍変更の問題も独自で決めたようである。弟は大学卒業を前に就職の準備をしていたが、拉致事件などで日本の北朝鮮にたいする世論があまりにも厳しかったので、韓国籍を取得した。母は弟の国籍変更のために、一緒に国籍を変更した。テミンは2010年まで朝鮮籍を維持したが、2010年の夏、臨時パスポートの更新ができなかったので、韓国に引き続き滞在するために国籍を変更した。母が弟と国籍を変更した際、母方の祖父の戸籍に家族を登録して戸籍整理をしておいたので、テミンは簡単に変更することができた。テミンが母や弟と一緒に国籍変更をしなかった理由は聞いていないが、彼が当時朝鮮大学に在学していたからではないかと思われる。弟は日本の大学に行っていたが、テミンは朝鮮大学出身で、卒業後も数年間総連傘下の地方組織で働いていた。オクの事例に照らしてみたら、彼が2010年に国籍変更をした背景には、総連系組織との仕事上のつながりがなくなったことも影響しているかもしれない。

ドイツ留学中にいまの夫に出会い結婚に至ったイサンは、2007年に国籍を変更した。韓国に行ったことがなかった彼女は、結婚したら住むであろう国に行ってみるべきと思った。韓国に行くために、最初は日本にいる母が韓国領事館で臨時パスポートを申請した。しかし、当時の政治状況の影響で臨時パスポートの発給が全くなかったために国籍を変更することになった。母は、国籍変更はしてほしくないが、パスポートのことでいつも苦労していることを知っているから、理解はできると言ってくれた。両親は朝鮮籍を維持し、イサンだけ国籍を変更した。しかし、日本の家族は結婚式に参加するために韓国に来た。両親ともに朝鮮籍だったけれども、父は以前にも仕事で何回か韓国に来たことがあり、母も友達と韓国に旅行に来たことがある。両親は、海外旅行のときやや不便だけど、わざわざ国籍の変更までする必要はないと言っている。また、イサンが度々日本に行って両親に会えるので、自分たちが臨時パスポートをもらえないとしても別に問題ないという。祖母は日本人だが結婚して朝鮮籍となった。しかし、知らないうちに韓国籍に変更していた。叔母の家族が韓国籍に変えたとき一緒に変更したらしい。叔母の家族はその後、日本に帰化した。

以上5人の事例で見ると、だいたいの場合、国籍変更を行う数年前から家族で国籍変更の可能性について話し合いを始めている。家族のうち一部が先に国籍を変えた例もある。変更の方針は決めておいて、適切な時期に実行したケースもある。いつが適切な時期かはそれぞれの事情によるが、総連系の組織にポストを持っていたり、そこで働いていたりする間は、適切でないことは確かである。5人の事例を聞いただけでも、家族のなかで国籍を2回も変えることになった人たちが複数存在している。国籍変更をめぐるこのような状況は、在日朝鮮人の生活のなかで国籍の変更は、もっぱら個人の選択の問題ではないということを示している。在日朝鮮人の国籍変更は、家族関係のなかで短い期間の間に展開するプロセスとして捉え、個人の国籍変更はそのプロセスのなかに位置づけられるべきものではないかと思われる。

5 “朝鮮”という記号——国籍変更者の心理的負担

国籍を変えた人たちは、程度の差はあるにしても多くの場合いくつかの不安や心理的負担を感じていた。

まず、朝鮮籍だったことで排除や差別を受けるのではないかと不安がある。オクは大学院入学の申請をしたとき小学校から各級学校の卒業証明書を提出する必要があった。それは在外国民にだけ要求されるものだった。オクは高校まで朝鮮学校出身なので、それが原因で不合格となるのではないかと心配した。この種の不安は、小学生だった1980年に父とともに国籍を変更し、韓国人と結婚して15年近くも韓国に住んでいる人からも聞いている。朝鮮籍だったことをあまり知られたくないので、聞かれたらうそをつくことはないけれども、聞かれなければ自分から言うことはない。

いわゆる“偽装国籍変更”と疑われるのではないかと不安を感じる人もいる。

チョンイは国籍を変えた後、韓国で在外同胞の参政権問題に関するシンポジウムに参加する機会があった。シンポジウムで、ある研究者が最近総連系の人たちが国籍を韓国に変更しているが、在日同胞に参政権を与える場合、彼らをどのようにスクリーニングできるのかという問題を提起した。チ

ヨンイは、それにたいして次のように語っている。

「自分なりに弁解はしましたが、とてもつらい気持ちでした。政治状況の変化によってどうなるかという不安もあります。しかし、いまや韓国がこのように成熟し民主化されたんだから、それくらいの包容力はあるんじゃないか、そういう期待や望みを持っています。この信頼感があるからこそここに住みたいんじゃないかな。」

朝鮮籍だったこととはやや違う次元の、言葉にたいする不安もある。2世、3世の在日朝鮮人が韓国に来て経験する挫折感やコンプレックスの一つに“韓国人なのになぜ韓国語ができないのか”というものがある。在日2世、3世にとっては日本語が母語であり、言葉をめぐる悩みは韓国語と日本語の間の問題として捉えられる。しかし、韓国に居住する朝鮮学校出身者は違う経験をしている。今回インタビューした国籍変更者はみな朝鮮学校出身で、言葉にたいしてほぼ共通の経験を持っている。「ディアスポラ在日韓人の“帰還”」(2008)で権が指摘したように、日本にたいする反感が在日朝鮮人に投射される面があって、日本語しかできない、あるいは日本語アクセントの強い韓国語を話す日朝鮮人にたいして抵抗感を持つかもしれない。しかし、日本で生まれ育った在日朝鮮人が韓国語を習得することはいかに困難だったか、韓国でもいまはある程度理解されている。実際、筆者がインタビューした朝鮮学校出身者の多くは、韓国で「キョポ(海外に移住した同胞を意味する)なのに韓国語が上手い」と褒められ、「何でそんなに上手いの」と聞かれたこともある。朝鮮籍の人たちは冷戦体制の下で心理的にも政治的にも韓国との距離が大きかったが、韓国籍の在日朝鮮人よりも韓国に適応しやすい面がある。それは朝鮮学校で教育を受けた場合、韓国語が上手くできるからである。むしろ彼らは日本で習った“ウリマル＝朝鮮語”と韓国語の違いにストレスを感じる。この場合、韓国語の能力そのものが問題なのではなくて、彼らの韓国語に見出されるアクセントや言い方が、あまり知られたくない自分のアイデンティティを表してしまうからである。

自然な韓国語を使うスンギョンも、まだ韓国語に自信がないと言った。英語は少し間違っても「ネイティブじゃないから」と諦めることができるが、韓国語は完璧じゃないといけないと思ってしまう。スンギョンは韓国に来る以前から日本で積極的に韓国語を勉強し、さらにオーストラリアで韓国人の友人との交流で韓国語が上手くなっただけに、相当の自信を持っている。にもかかわらず“完璧な韓国語”に拘るのは、自分の言葉に刻まれている“朝鮮性”についての自意識が強いからではあるまいか。音楽をやるために韓国に来たオクも、韓国に行って勉強するためには、言葉を韓国式に直さないといけないと思ったそうだ。「朝鮮学校で習った言葉は不十分だから、ちゃんとした言葉を学びたいと思いました」という。ここで「不十分」というのは、日本で習ったことと北朝鮮式であることの両方が重なっていることにたいする認識とも思える。

以上のように、朝鮮学校で教育を受けた国籍変更者は、韓国で自分たちが持っている“朝鮮性”や“朝鮮”という表象に向き合わなければならない。日本で国籍変更の前から韓国語や韓国大衆文化を吸収していたスンギョンとオクは、在日朝鮮人として自分たちが持っている“朝鮮性”を保ちつつも“韓国”というものをも進んで受け入れることができる。これは2世にとっては難しいことかもしれない。上記の

諸々の不安は、程度の差はあるにしても、大抵の人たちに共通していると思うが、対応の仕方は必ずしも同じではない。スンギョンとテミンは自分が朝鮮籍だったこと、朝鮮学校出身であることを日本や韓国、あるいは留学先のオーストラリアで知り合った韓国人にはじめから明らかにしている。それでも問題なく受け入れてもらっており、人間関係が崩れた覚えはあまりない。テミンは朝鮮大学出身で総連組織で働いていたにもかかわらず、普段はそのことで不安を感じたことがない。朝鮮籍だったときも、周りの人たちは「朝鮮籍だから怪しいやつだ」と冗談ぽくいながら、自然に受け入れてくれていたと思っている。言葉の問題もそれほど感じていない。彼は日本にいたとき、韓国に行ってきた友人が流暢な韓国語をしゃべるのに反感を持ったことがある。韓国にいたから語彙、文法などを現地に合わせて直すことは理解できるが、アクセントまで韓国式に変えるのかと腹立たしく思ったものだ。しかし、スンギョンやオクと同じくテミンも事前に韓国に行くために努力しているし、朝鮮学校で習ったウリマルとは違う韓国語について十分自覚していたので、心構えを含め何らかの準備ができていたと推測される。

6 本国との新しい関係

本稿で考察した5人の在日朝鮮人3世は、いまは韓国籍となって韓国に住んでいる。彼らにとって韓国は行けるとも思わなかった、タブーでさえあった国である。が、90年代の末ころから、家族や朝鮮籍の友達のなかで韓国に行ってくる人たちがいて、“韓国大好き”、“韓国かぶれ”の人も現れた。彼らが韓国に行ってみたいと思ったのは、主としてその人たちから伝えられた韓国に関する話や総連コミュニティの中で生じた変化によるものである。彼らは日本で韓国人の友人ができたとか、親しく交流したという話はほとんどしていない。しかし、韓国にたいする思いが“行ってみたい”から“住んでみたい”へと発展したのは、韓国で、あるいはドイツやオーストラリアなどで形成された韓国人との交流に支えられた部分が多い。

韓国籍になり韓国に住んで長くて9年、短くて6ヶ月となる彼らは、いまは韓国と自分のかかわりをどのように考えているだろうか。韓国人と結婚して住んでいるチョンイ、イサン、スンギョンの場合は、韓国に定着する可能性が高いだろうと予想したが、必ずしもそうではない。在日朝鮮人女性と韓国人男性の結婚の場合、いちおう女性が韓国にお嫁に来るという男性中心的な形を取っていても、後に韓国人男性が日本に移住する可能性をも孕んでいるように思われる。少なくともこの3人の事例でみる限り、韓国と日本のどちらに住むかを決めるには、本人の仕事や将来の展望はもちろんだが、家族もたいへん重要な要因である。夫の日本語能力や職業、将来のキャリアにたいする希望、また、子どもの将来や育て方についての考え方は重要な要因である。しかし、20～30代の若いカップルだからかもしれないが、この問題に関して、両親についての言及はほとんどなかった。

チョンイは数年間の厳しい時期を乗り越えて、博士号を取り、いまは韓国で研究者として活動を始めており、いろいろなネットワークもできつつある。チョンイは、以前に比べていまは韓国の観点から物事を見ているような気がするという。在日はよく韓国で差別を受けるといふけれども、在日自らの韓国にたいする認識をも相対化してみる必要があると思うようになった。在日も韓国にたいして偏見が

なかったとはいえないからだ。チョンイは、いまは韓国が好きで、韓国に定着したいと思っている。

結婚を間近にしているスンギョンは、韓国でキャリアを發展させている点ではチョンイと同じだが、スンギョンの場合、日本の会社から支社への派遣という形で以前の仕事との連続性を保っている。会社の都合で日本に戻る可能性も十分あるし、アメリカ、あるいはまた違う国に移動することもありうる。夫は日本に関心があって、日本に住んでみたい、できれば永住権を取得したいという。また、将来、子どもたちの半分は日本に、半分はアメリカに行かせてみたいし、子どもたちを日本で民族学校に通わせるのも良いだろうと思っているそうだ。夫は民族学校では子どもたちが強い人間に育つと思っているらしくて、それは、鄭大世、李忠誠などの影響かもしれないという。

イサンは韓国に来て6ヶ月で、結婚生活も大学院もまだ始めたばかりといえる。夫は会社に勤めているが、いまのところ、日本に住んでみたいとか、日本で仕事をしてみたいという話はあまり聞いていない。イサン自身は、演奏会などで日本に行くことが度々あるが、いまは、韓国で家庭生活と学業、キャリアを築いていくことに重点があるようだ。

以上のように、韓国人男性と結婚して韓国に住んでいる3人の女性は、全員それぞれ専門的なキャリアを追求しているが、自分の都合や希望だけでなく、家族関係、とくに夫や子どもの将来も、韓国と日本のどちらに住むかを決めるうえで重要な要因である。

いまのところは韓国に定着すると思っても、昔のように、ここだけが唯一の定住地という認識はない。家族のライフサイクルのなかで、必要に応じてどこでも生活することができると思っている。また、もし韓国に定着するとしても、子ども世代、さらに代々ここに根付いて住むという意味での定着の認識は全くなくて、子どもたちには、むしろ韓国以外の地でも生活できる可能性をできるだけ確保してあげたいと思う。特別永住権は、その意味でも非常に重要な意味を持つ。韓国に定着したいと思う人も特別永住権は放棄しないつもりで、子どもにもその権利を持たせて維持させたいと思っている。

結婚していないテミンとオクの場合は、少なくとも現在は、上の3人のような家族要因はあまり関係のない話である。テミンは日本に就職が決まったので近いうちに日本に帰るが、もし韓国により良い仕事があれば、また韓国に戻りたいと言っている。テミンは積極的な性格で、韓国でも多くの知人や友人があり、人的ネットワークを作っているように見える。一方、オクは日本に帰るか、あるいは別の国に行きたいという。オクは、韓国に来る以前は韓国にたいして憧れを持っていたが、いまは自分が韓国を甘く見ていたと感じている。韓国に来て1年になるオクは、自分がネイティブの韓国人になるのは不可能で、やはり自分は“在日朝鮮人”であるという自覚が強くなっている。思いがけなく、彼女は韓国で“日本再発見”をした。日本では日本のことが好きではなかったが、むしろ韓国で日本の音楽にたいして新しい認識を持ったし、韓国で何か問題があった場合に日本人の友人に励まされ、支えられた。韓国に留学している日本人は、在日朝鮮人についての理解があるほうなので、そのような関係が作られるのかもしれないという。オクは韓国に留学して1年経っているが、いま住んでいるワンルームを住居よりはスタジオのように整備して、授業のとき以外には、そこで音楽を作っている。カナダやヨーロッパから来ている留学生と一緒に音楽創作をやっている。おそらく彼女は、テミンと性格の違いもあるけれども、このような生活スタイルが韓国人との交流にある程度影響しているのではないかと思われる。韓国に来て1年過ぎており、ここで創っている音楽が今後新たな交流を生み出せる

かもしれない。

では、いまは彼らの北朝鮮や日本にたいする認識なり態度はどのようなものだろうか。彼らのほとんどは、朝鮮学校時代に北朝鮮に行った経験がある。朝鮮学校では、北朝鮮は“祖国”であった。しかし、北朝鮮に行くのは、韓国の場合と違って、個人的な自由旅行ではなくて、団体で何かの行事に参加する形で行った。彼らは北朝鮮にたいしてはあまり多くのことを語らない。おそらく、彼らの北朝鮮訪問はまだ小さいときだったので、経験そのものが限られているのであろう。彼らは北朝鮮については、主に歓待されたこと、そこの住民たちが素朴で暖かかったことを覚えている。そして北朝鮮の政権と民衆を分けて捉えようとする。イサンは、“北のウリナラ、南のウリナラ”という表現を使い、テミンは、これまで以上に朝鮮籍の人たちのためにできることをやりたいという。

5人とも朝鮮籍を韓国籍に変更したことは、まるでいま困難な状況にある北朝鮮を見捨てたもののような心理的負担感を持っているようにみえた。“国籍変更”は単にパスポートのためだとか、仕事の都合のためだとかといった実用主義的な観点が強調されるのは、当事者の立場としては、こういった心情が背後にあるからではないかと思われる。在日3世の若者たちは、体制イデオロギーには馴染みがないし、ナショナリズムとしての民族・国家意識も希薄である。しかし、政権や政治体制とは違う、心のよりどころとしてきた“ウリナラ”とそこの同胞にたいする思いは存在するし、“朝鮮”という記号はそのような意味を持つ表象である。韓国籍になったことは、そういう気持ちまでも変わってしまったことではないと、自らにたいしても言いたいのではないかと思う。

今回の考察を通じて、5人の“国籍変更者”の韓国籍取得が単純な実用主義的な行為ではなくて、これまで遠い存在だったもう1つの“ウリナラ”にたいする思いや、そこの具体的な人々との関係がその基底にあったことが見えてきた。これは、朝鮮籍を変更したけれども、気持ちは変わっていないというのと通じるものである。これまでは、“国籍”というものが2つの対立する体制のどちらかへの排他的な帰属を意味してきたために、閉ざされてきた部分がある。その両方につながる事ができればという願いが、彼らの心の底にはあるのではないだろうか。

以上のような韓国や北朝鮮にたいする思いは、彼らの日本にたいする思いとどのように関連するのか。彼らの国籍にたいする態度と同様、特別永住権も単なる手段として捉えることはできないのではないかと思う。国籍と特別永住権の両方を持っていることは、両国である程度安定的な地位を持って生活できるメリットがある。上で見たように韓国籍をとって韓国に定住する場合でも特別永住権を維持し、子どもにもその地位を与えたいと思うのは、確かにこのようなメリットがあるからであり、その限りではこれも実用主義的な態度といえる。しかし、日本を再発見したというオクの話に端的に現れているように、在日3世の人たちは日本ネイティブで、これまでの生において多くの部分をここで形成してきた。“日本”とその中にこそ存在する“在日朝鮮人社会”がある。家族がいて、多くの人間関係があり、人的資本や文化資本もある。5人ともに言ったのは、韓国で日本人の友人のネットワークと在日朝鮮人同士のネットワークのことである。いまは、朝鮮籍から韓国籍に変えた人たちのネットワークも作られ、韓国生活の支えとなっている。特別永住権は単に権利を示す法的地位ではなくて、そこまで至る在日朝鮮人の歴史が含まれているものである。在日朝鮮人3世の若い世代にも、その特別永住権の持つ意味は重いはずである。

1965年の日韓協定に基づいた協定永住権の獲得と関連して、その後、在日朝鮮人社会では“朝鮮”から“韓国”への大移動が起きている。協定永住権と結びついた“国籍変更”は、本国との新たな関係を求めている行為ではなくて、日本定住の安定性を確保するためのものであった。1965年から1970年代にかけての在日朝鮮人社会の韓国にたいする認識は総じて否定的で、一般的にはそこに住むということは現実の選択肢として考えられていなかった。あの時代の朝鮮から韓国への“国籍変更”における韓国籍は、日本永住権の獲得という目的を超えて、韓国そのものへの期待や直接的な結びつきへの希望をどの程度含んでいるものだったのかは疑問である。

今日の朝鮮から韓国への“国籍変更”は、それ自体が新しい現象ではない。協定永住権との関連性以外にも、在日朝鮮人同士の結婚で、朝鮮籍の女性が韓国籍の男性と結婚して国籍を韓国に変えた例もめずらしくはないようである。今回、在韓在日朝鮮人3世のインタビューを通じて見出された今日における“国籍変更”の新しさは、韓国に住み生活するという実態を伴う可能性が高いという点にある。ルーツがあるところとはいえ、これまで“祖国”とは北朝鮮のことで、朝鮮学校時代に“祖国”を訪問し歓待を受けた覚えを持っている彼らにとって、韓国に居住するのはある種の勇気がいることである。それは、韓国人との具体的な人間関係が形成されてこそ可能だったと思われる。もちろん、韓国には反共イデオロギーが根強く存在しているし、かつ最近では北朝鮮との軍事的緊張が生じたりしており、彼らは朝鮮籍だったことにたいする不安から全く自由ではない。しかし、彼らを受け入れてくれる、サポートしてくれる人たちがいるし、自己実現を追求することも可能である。こうしてみると、いまの在日朝鮮人3世にとって“国籍”とは、理念化ないし抽象化され、実態に合わなくなった時代錯誤的なものではなくて、むしろ親世代よりも実質的な意味を持つようになってきたものといえよう。韓国の国籍は、彼らにとって日本の領土を超えたところで自由に出入りでき、仕事を持つことができ、不利な点や差別的な待遇が多少はあるものの国民としての市民権が基本的に保障される場所を確保することを意味する。在日朝鮮人における国籍の文脈が変わってきているのだ。

*1 謝辞:今回、インタビューに応じてくださった方々のご協力で本稿を書くことができた。インタビューや補足質問が数回重なる場合でも、快く応えていただいた。この場を借りて心から感謝を申し上げたい。なお、本稿に出てくる人名はすべて仮名である。

*2 “KN TV”は衛星放送の有料チャンネルであるが、正式な名称は確認できなかった。放送は1996年から始まっており、最初は全体番組の中で一部だけが韓国のものだったが、2000年前後に韓国のテレビ番組ばかり放送する方向に変わっているそうである。